

コロナ禍における奄美大島の観光客の回遊行動分析

日本大学 学生会員 ○土屋 大樹
日本大学 正会員 伊東 英幸
日本大学 非会員 藤井 敬宏

1. はじめに

奄美大島は、2014 年 7 月に LCC（成田空港－奄美空港）の新規就航などから、入込客数が増加傾向となり、2019 年には過去最高となる約 53 万人¹⁾の入込客数を記録した。2020 年 4 月以降は新型コロナウイルス感染症流行により入込客数が減少傾向となった。2021 年 7 月には世界自然遺産に登録され、After コロナ以降はインバウンドも含め国内外から観光客の急増が見込まれている。

しかし、奄美大島の観光客による経済効果の推計²⁾や観光イメージや観光活動の特徴を整理した研究³⁾が行われている一方で、コロナ禍における観光客の回遊行動については明らかとなっていない。

そこで本研究は、コロナ禍における 2022 年 8 月と 9 月の観光シーズンに奄美大島を訪れた観光客を対象に、観光スポット・施設への訪問状況や回遊行動の特性について分析することを目的とした。

2. 研究方法

2. 1 調査概要

奄美大島の観光客の行動などを把握するため、奄美空港での配布、ならびに観光スポットやホテルにアンケート調査票を設置し、アンケート調査を実施した（表－1）。

表－1 アンケート調査の概要

対象者	奄美大島を訪れた観光客
調査期間	2022 年 8 月 22 日（月）～
調査方法	アンケート調査票の配布 および設置、郵送回収
調査項目	旅行期間、訪問人数、訪問回数、 旅行費用、訪問地について、 訪問者の意識調査、個人属性
配布枚数	約 550 部
回収数／率	115 部／20.9% (有効サンプル数 49)

2. 2 分析方法

観光シーズンである 2022 年 8 月と 9 月に来訪した観光客のうち、奄美空港を利用した観光客を対象に分析を行った。アンケート調査では、ガイドブックなどから観光スポット・施設を 43 か所抽出し、奄美大島滞在中

のすべての日程において、訪問した観光スポットの訪問順番、出発時刻、移動手段を詳細に尋ねた。また同行した人数を含め回遊行動の分析を行った。

回遊行動分析では、アンケート調査から明らかになった観光スポット・施設の回遊データを用いて、トリップ連関図を作成した。なお、トリップ連関図で用いたパスの太さは、全トリップ数のうち何パーセントの観光客がそのパスを通過したかを示した。

観光地の集中度については、カーネル密度分布を用い分析を行い、全来訪者のうち何パーセントの観光客が訪れたかを示した。

パスの通過割合 P_i と集中度 C_i の算定式について、それぞれ (1) 式、(2) 式に示す。

$$P_i = P_n / P \tag{1}$$

$$C_i = v_n / v \tag{2}$$

ここで、 P_n は観光地間のトリップ数、 P は全トリップ数、 v_n は各観光スポットの訪問客数、 v は同行者を含めた総来訪者数を示している。

3. 分析結果と考察

3. 1 アンケート調査の結果

本アンケートの有効回答数は 49 となり、同行者を含めると 136 人となった。有効回答を答えた代表者の属性を集計した結果として、年齢別では、20 代、30 代、50 代、60 代がそれぞれ約 20%、40 代が 16.3%、70 代以上が 4.1%であった。

居住地域の割合は、関東地方が約半数と一番多く、近畿地方が 26.5%、九州地方が 12.2%となったが、北海道、東北地方、四国地方からの観光客の回答はなかった。この理由として、コロナ禍ではこれらの地域において奄美大島への直行便がなかったことが原因として考えられる。

また、観光客が行ったアクティビティは、「自然探検・散策」、「マングローブカヌー」、「マリンレジャー」が約半数を占めており、奄美大島の自然を活かした観光を目的として訪問している方が多い結果となった。

キーワード 奄美大島、回遊行動、COVID-19、トリップ連関図
連絡先 〒274-8501 千葉県船橋市習志野台 7-24-1 日本大学大学院理工学研究科交通システム工学専攻 TEL047-469-6476

3. 2 回遊行動と集中度の分析結果

本研究で用いた総トリップ数は 1,625 トリップとなった。集中度が高い観光スポット・施設を表-2 に示す。ホテルや飲食店、商店など島中心部の「名瀬・名瀬港エリア」や、マングローブカヌーの拠点となる「道の駅奄美大島住用」に多くの観光客が集中することが示された。

表-2 観光スポット・施設の集客度

観光スポット・施設	割合
名瀬・名瀬港エリア	66.9%
道の駅 奄美大島住用	63.2%
ばしや山村	46.3%
龍郷町エリア（国道 58 号線沿い）	46.3%
あやまる岬	45.6%
瀬戸内町・古仁屋港エリア	45.6%

観光地間の通過割合が高い観光スポット・施設間のトリップの割合を表-3 に、回遊行動の分析結果を図-1 に示す。観光スポット・施設間の通過割合では、奄美空港と名瀬・名瀬港間や名瀬・名瀬港を拠点としたトリップが多くみられた。また大和村や宇検村には、あまり観光客が訪れない傾向が見られた。

表-3 観光スポット・施設間のトリップの割合

起終点		割合
道の駅 奄美大島住用	瀬戸内・古仁屋港エリア	4.2%
名瀬・名瀬港エリア	大浜海浜公園	3.8%
名瀬・名瀬港エリア	道の駅 奄美大島住用	3.0%
名瀬・名瀬港エリア	倉崎海岸	2.9%
瀬戸内・古仁屋港エリア	高知山展望台	2.6%

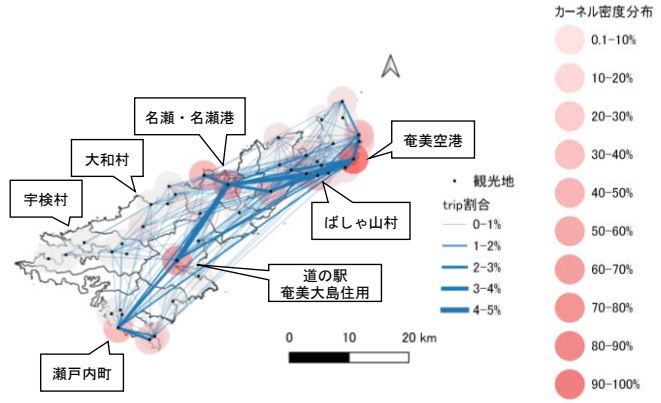


図-1 トリップ連関図

3. 3 観光客の特性とトリップの分析

観光客の個人属性を基に、トリップ数やトリップ長との関係について分析を行った。観光客の居住地域別に、総平均トリップ数と総平均トリップ長との関係について分析したが、特に違いは見られなかった。次に、奄美大島に初めて訪れた「初来訪者」と来訪回数が 2 回以上の「再来訪者」によるトリップの比較分析を行った（表-4 および図-2）。表-4 より、初来訪者と再来訪

者とでは、平均滞在日数、日平均トリップ数には大きな違いが見られなかったが、同程度の滞在日数に対し、日平均トリップ長は初来訪者の方が約 17km 長かった。また、図-2 より、初来訪者の方が再来訪者より 1 旅行あたりの訪問する観光スポットが多く、かつトリップ長も長いことから、初来訪者は再来訪者に比べ、広範囲にわたって移動しつつ観光していることが示された。

表-4 初来訪者と再来訪者の比較

	初来訪者	再来訪者
サンプル数	25	23
日平均トリップ数	3.9 トリップ	3.3 トリップ
日平均トリップ長	74.9km	58.0km
総平均トリップ数	14.0 トリップ	11.2 トリップ
総平均トリップ長	261.0km	187.7km
1 トリップあたりの距離	18.6km	16.7km
平均滞在日数	3.5 日	3.5 日

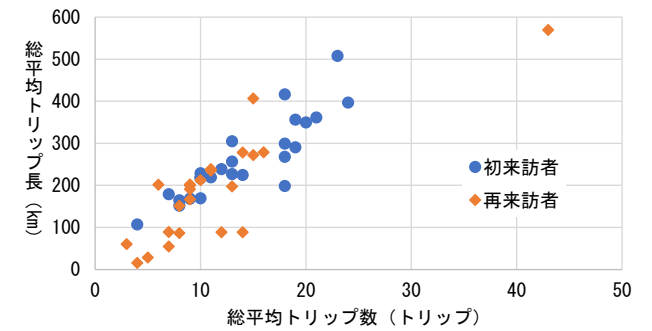


図-2 総平均トリップ数と総平均トリップ長の関係

4. おわりに

本研究では、奄美大島の観光客を対象としたアンケート調査を実施し、コロナ禍における回遊行動を明らかにした。その結果、島の中心部やアクティビティ施設に集中する回遊行動が示され、観光客の訪問特性によってトリップに違いがあることが示された。

今後の課題として、本研究では観光シーズンのみを対象として分析を行ったため、今後は年間を通じた回遊行動について分析を行い、季節による回遊の変化や、コロナ禍前後の回遊行動を比較することが必要である。

謝辞

最後に、今回のアンケートの配布にご協力いただいたホテルの方々、観光施設の方々に感謝申し上げます。

参考文献

1) 鹿児島県：観光統計, <http://www.pref.kagoshima.jp/eq01/chiiki/oshima/chiiki/zeniki/oshirase/kankoutoukei.html>
2) 裘春暉, 橋本介三：奄美大島の観光価値に関する経済評価分析, 観光研究, Vol.16, No.1, pp.1~8, 2004
3) 清瀬正太郎, 十代田朗, 津々見崇：奄美大島における観光イメージおよび観光活動の変遷と宿泊施設の関係, 日本建築学会計画系論文集, Vol.86, No.784, pp.1704-1714, 2021.